

歴史は未来の羅針盤

温故知新

日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。第二巻「文化財編」は平成一八年度末に刊行予定です。このコーナーでは、町史の内容や調査報告などを紹介していきます。皆さんに町史に親しんでいただき、実際に手に取ってご覧いただきたいと思います。

今回は、「自然編」第五章「郷土の動物」から町内の山地・丘陵に生息する動物を紹介します。

豊かな自然が育む動物

鈴鹿の山並み、山すそに広がるなどらかな丘陵、平野部を流れるいく筋もの川。これら豊かな自然に包まれて、日野町内には多様な動物が生息しています。町史の自然編を刊行するにあたり実施した調査によると、哺乳類29種・鳥類79種・爬虫類11種・両生類16種・魚類44種・甲殻類5種・貝類9種・昆虫類711種（従来の確認記録を含む）の合計904種におよぶ動物が町内に生息していることが確認されました。

町域の東部に広がる山地には、動物生息に適した落葉広葉樹が茂る自然林が広がっており、多様な動物をみることが出来ます。哺乳類では、特別天然記念物のニホンカモシカをはじめイノシシ・ニホンジカなどの大型動物が数多く生

息しています。

鳥類では、ミソサザイ・ヒガラなどの留鳥のほか、コルリ・クロツグミ・キビタキなどの夏鳥が飛来して繁殖しています。このうちコルリは、県下の標高一、〇〇〇メートル以上の山岳地帯のごく一部でのみ繁殖する珍しい鳥として貴重です。

昆虫類では、多種のチョウ・バッタ類が生息し、「春の女神」「春のはかない命」と称されるギフチョウ、国蝶のオオムラサキなどが美しい姿を見せます。また、綿向山



▲ニホンカモシカ

周辺に生息するアサギマダラは、

春は北へ、秋は南へと長距離移動を行う珍しいチョウで、滋賀県と九州・沖縄・台湾の間を行き来するものもあります。

このほか、大型哺乳類の多い林道沿いではヤマビルが多く見られ、山地部の特徴となっています。山地部を流れる河川には、かつては溪流性の魚類が多くみられました。ダム・堰堤の建設によって種類が減少しました。現在では、主にイワナ・カジカ・タカハヤなどが生息しています。



▲ハッチョウトンボ

山麓部に広がる丘陵地は、「里山」ともいわれ、古くから動物と人間が共存してきた場所です。哺乳類では、タヌキ・キツネなどの身近な中型動物をみることが出来ます。一方、環境変化の影響を受けて山地を追われた動物が増加しており、とくにニホンジカ・ニホンザルによる農業被害が深刻化しています。

鳥類では、ホオジロ・ウグイス・カラ類など中小の鳥が多数生息するほか、猛禽類のサンバ・オオタカも繁殖しています。冬季には、山から下りてくるキツツキの越冬場所ともなります。丘陵部にあるため池には、コイ・ドジョウの仲間をはじめ、在来種の魚類が多数生息しています。

昆虫類では、ため池周辺でトンボの仲間が多く見られ、湿地帯では全長2センチメートルにも満たない世界最小のトンボであるハッチョウトンボの生息が確認されています。

こうした多種多様な動物たちが生息する豊かな自然環境を大切にすることは、我々が安心して暮らせる環境づくりにもつながります。その第一歩として、身近な動物の様子に目を向けてみてはいかがでしょうか。